茶わん祭り　山車の芸題

寿宝山（橋本組）

芸　題：岩見重太郎　狒狒退治の場

下人形：岩見重太郎　宙人形：狒狒（ひひ）

頃は戦国時代の末期、岩見重太郎の父・岩見重左衛門は、筑前小早川家の剣道指南役を勤めていたが、同藩・広瀬軍蔵に殺害された。父の仇討ちを果たすべく諸国を巡っていた岩見重太郎は、石見の里にさしかかった。里では、毎年の例祭の時、白羽の矢が立った家の娘を狒狒に人身御供として差し出さなければならなかった。今年は庄屋の娘がいけにえにされることとなり、悲しみにうちひしがれていた。村人の嘆きを聞いた重太郎は、「もう悲しまなくてもいい、わたしが狒狒を退治してやるから安心しなさい」と言い、娘になりすまし、供え物の箱に刀を持って入いり、村人たちに本殿まで運ばせた。激しい戦いの末に、村人の敵・狒狒を退治したのである。村人たちは、手に手を取って喜び、重太郎に感謝したのである。その後、重太郎は丹後の天橋立に於いて、父の敵・軍蔵を討ち、見事本懐を遂げるのである。

永宝山（中村組）

芸　題：忠臣蔵　討ち入りの場

下人形：大石内蔵助　　宙人形：吉良上野介

時は、五代将軍・徳川綱吉の時代。勅使応接役を命じられた赤穂五万石当主・浅野内匠頭は、作法指南役の吉良上野介から、ことあるごとに数々の嫌がらせを受けていた。内匠頭は家臣たちの機転で、数々の窮地をなんとか切り抜けていたが、勅使登城の当日、江戸城の松の廊下でついに刃傷事件を起こしてしまう。事件は迅速に処理され、内匠頭は即日切腹。赤穂藩にはお取りつぶしの決定が下され、一方の吉良上野介はおとがめなしとなった。主君の悲報が届いた赤穂では、城代家老・大石内蔵助を筆頭に六十数名が主君の仇討ちを決議。世を欺くため城を明け渡し、その素振りを見せないように行動することを誓い合ったのだった。赤穂藩が仇討ちの動きを見せないことで、赤穂藩士の評価は急落し、腰抜け呼ばわりする者たちも出る始末であった。しかし、上野介の実子・上杉綱憲の家老・千坂兵部は、赤穂藩士の動きを警戒し、上野介の身辺警護を怠らなかった。そんな中、元禄十五年十二月十四日、雪の中集結した内蔵助以下赤穂浪士四十七人は、本所松坂町の吉良邸に討ち入りを敢行。上野介の首を獲り、大願を果たしたのである。

丹宝山（北村組）

芸　題：先代萩　足利家御殿の場

下人形：正岡　　宙人形：千松

奥州の大名・足利頼兼はお家乗っ取りをたくらむ仁木弾正や大江鬼面たちにそそのかされて放蕩に身をもちくずし、幕府の命令で隠居させられた。家督は幼少の嫡子・鶴千代が継ぐことになったが、弾正らは、幼君・鶴千代の命を奪おうとつけねらっていた。鶴千代の乳母・正岡は、自分が炊いたご飯だけを食べ、ほかのものは口にしないように言い聞かせるなど、幼君を護ることに努めていた。しかし、管領山名宗全の奥方・栄御前が、将軍家から賜ったと偽り、毒入りの菓子を鶴千代に勧めます。断ることができない正岡と鶴千代が進退きわまったところへ、正岡の息子・千松がとびだしてきて、そのお菓子を食べます。千松が苦しみ始めると、同席していた弾正の妹・八汐は、毒が入っていたことを知られないように、拝領の菓子を蹴散らすとは無礼だと千松を短刀で嬲り殺します。皆、驚き騒ぐが、正岡は顔色ひとつ変えません。しかし、皆が帰った後、ひとり残った正岡は、千松の遺骸を抱き、その働きを誉めて、泣き伏すのでした。